opusdei.org

読書―2。最もよい ものを選ぶ

本や他の読者との対話は、ものごとを読み取る力を高め、 展望を開き、幻滅を防ぎ、読 書のスキルを向上させます。

2017/09/06

前回の記事を読む

人の一生を変える書物がある。聖ア ウグスティヌスはキケロの『ホルテ

ンシウス』を読んで、人生の行き先 を変えた。ずっと後で『告白』の中 でこう述懐している。「この書物は 私の情念一変し、そして主よ、私の 祈りをあなた自身に向けさせ、私の 願いと望みを改めさせた。 (…) あ なたの計画に帰ろうと立ち上がりは じめた。」(『告白』3,4,7)彼の神 への道のりは、いろんな回り道をし た後、改心へのより決然とした方向 を取った。ここでもまた偶然手に 入った本、『ローマ人への手紙』の 一節が彼をなお引き止めていた壁を 打ち壊したのだった。

見つけた情報を共有する

すべての本がそんなに劇的に人生の 方向を決定するというわけではない が、読書は読む人を変えていく。本 は魂を細やかにしたり、鈍感にした りする。あるいは広い視野を与えて くれたり、視野を狭めたりもする。 私たちの人格は、時が経てば経つほ ど、何を読んだか、また何を読まなかったかを反映する。何年もの間、しっかりした基準に従って選択された読書から栄養を吸収した人は世界と人々に対する開かれた見方を身につけ、複雑な現実の中での自己いるとを強力なことを感知するために必要な感受性を培う。

私たちを成長させてくれる本に出会 うのはいつも簡単というわけではな い。娯楽の本ですらいつも簡単に見 つかるわけではない。そのため他人 に尋ねることがとても役立つ。ある 町に家を建てようとする場合、土地 の人に尋ねるなら、GPSではわか らない価値ある情報を教えてくれる こともよくある。また、読書に通じ た人に導いてもらうだけではなく、 今度は私たちがよい読書について他 人に薦めることもできる。自分が読 んでいるものについて話すことは家 族生活や友達との会話を豊かにし、

ときには文学サロンや他の文化的活動に発展することもある。良い読書が口コミでとても効果的に広がっていくのなら、読書クラブを作ったり、よい本屋に足しげく通ったり、本屋さんと付き合い頻繁に話をしたりすることも役に立つ。

年齢やテーマや好みによって分類さ れた、良書の選集が沢山ある。それ にしても、最良の選集は、各自が独 自に作っていくもので、それは似た 好みをもつ友人の助言や、授業や会 話などでの先生や友人の何気ないコ メントをもとにして作られる。興味 を引かれる本をすべてすぐに読むこ とは無理なので、計画を立て、今読 む本、後で読む本というふうに読書 の順番を決めておくのがよい。こう すると読み忘れる本がないというこ とで安心できる。またもっと読みた いと思うとき、たまたま手に入った ものを読むしかないという事態を避 けることができる。

インターネットは巨大なコピー機の ようであると言われた。印刷機が発 明されて以来、書物の出版が容易に なればなるほど、価値のない本が叢 生することが確認された。しかしな がら、インターネットは無数のつま らない記述 一ときによい意向をもっ て作成されたとはいえー とともに、 今の現実を的確に示す文書、あるい は多くのマスコミがほとんど問題に もしない本質的な思想を紹介する文 書を載せている。ここにおいても、 よい助言者の助けを得て、また自分 の経験を鑑みて、信頼できる著者や サイトを見つけて置くのは無駄では ない。特定の内容のサイトに登録す るための、あるいは興味を引く文書 だけをオフラインで読むためのアプ リケーションはこの意味でとても役 に立つ。インターネットは、絶版に なるか、あるいは図書館でも見つけ ることが難しい古典文学や古い書物 を読む可能性も増してくれる。.

本と対話する

批判(吟味)とは語源的に「見分け る、選択する」という意味である。 批判の能力をもって読書をすると は、それぞれの本の最もよいものを 取ることを意味する。作家たちも私 たちと同様、自分を取り囲む環境や 文化に影響を受けている。それゆ え、本を読むときは、たとえば次の ように問うてみてはどうだろう。な ぜこの著者はこのような表現をする のだろう。登場人物たちを通じて表 そうとしている当時の理想は何だろ う。友情や赦しや忠実といった普遍 的な価値について著者はどう考えて いるのだろう、などなど。言うまで もなく、著者を危険視して読めとい うことではない。そういう態度の裏 には、ときにはネガティブな世界観 や自分の知識や思想についての自信 のなさが隠れていることがある。そ れよりも一つ一つの本に光と影を見 いだそうとするべきで、場合によっ

てはいくらかの本に現れる思想や判 断を清めることである。このように すれば、本との対話が始まり、それ は著者との直接のやりとりに至るこ ともあり(多くの場合、作家は読者 が自分の作品について感想や提案を 伝えてくれるのを感謝する)、自分 の確信を検討し直すこともある。読 者からの手紙を読んで、ある著者は 作品に修正を加えるかもしれない し、またある人は少なくともニュア ンスを変えるかもしれない。キリス ト教徒にとって、バランスのとれた 批判的精神を培う最良の方法は、ど うすれば社会をキリスト教に近づけ ることができるかという使徒職的関 心をもって本を読むことである。楽 しい時間を過ごそうという気持ちだ けでなく、我々と同時代の人の思想 を理解し、それを浄化し福音の諸価 値と和解させたいという望みをもっ て読むことである。

このような態度を保つなら、読書は 深く堅固で理性的な確信を形成し、 しっかりした判断基準を持ち人格を 発展させるのに役立つ。映画も似た ようなことがある。ある映画がその 内容や映像によって私たちを感動さ せるとき、世界や人間の一面をより 見える形で表しているのだ。そうし て各人は自分の判断力を形成し、自 分が納得し他人にも説明できる基準 をもとにして正しい決定をすること ができるようになる。キリスト教信 仰に根ざした個人的な価値観を獲得 し、信仰に一致した生活を堅固にす ることになる。

何かが心の中で動く

よい読者はよく同じ本を何度も読み返す。かつて心を動かした本に戻るのだ。再読ができるために効果的な方法はときどきメモを残すことで、それによってある本を読んだとき照らされた魂の隠れた経験に戻ること

ができる。この習慣は私たちが自分を知ることを助け周囲を観察する目をより鋭くすることを助ける。メモを取ることで、むかし感動した物語や文章をもう一度読みたいと思うのに、その箇所が見付からないという悲劇を避けることができる。

なにごとにおいて同じ事が言える が、ここでもバランスを考えねばな らない。もっぱら私たちの記憶力に 頼ることもよい。記憶力は想像以上 に多くのことを覚えているからであ る。他方、読書は書物との内的な対 話を暖める人においてもっと深い影 響を残す。その影響は、多くの場 合、文章全体を書き写すというより も、受けた印象をメモすることに よって与えられる。それはたどたど しい什方で、内部で生まれたぼんや りした直感に輪郭を与えていく。こ の根気のいる作業によって、世界や 文化や人の内面を探求する私たちの 旅は豊かなものになる。風景は単に

私たちの目の前を通り過ぎて消えていくのではなく、私たちの内な問題を通り過ぎて消えて、私たちの内な問題をした。 体化され、人のかいとのような世界は世界のではなり、かを理解して、教皇様が強く「新した者という」とができるようになる。 して、数には、 はない、 ができるようになる。

個人の責任

若者たちを連れてマドリッドの病にです。とを連れてマドリットの思していた頃のことを話していたりではこうにはいいないがある。にいいないがあるにいいないがあるにいいないがあるにいいがあるにいいがあるがあればいいがある。ではいいがあるがでした。できませんがらでしたがでいるがあります。できましているがあります。できましているがあります。できましているがあります。

た1。羊のことを絶えず考えるよき 牧者として、師は読書の際にはしっ かりと責任感をもって本を選ぶこと の重要性を皆に教えていった。それ は読書が人の知的、霊的な形成に とって強い影響力を持つからであ る。カトリック教会のカテキズムで は、「第一のおきてはわたしたち に、賢明に警戒して信仰を養い守 り、信仰に反するあらゆることがら を退けることを要求します」とあ る。また似たようなことを教皇様も 言っておられる。「ある番組がわた しにとって良いものでない、つまり 私が大切にしている価値観をあざ笑 い、私を軽薄な人間にする、あるい は汚れたことを見せるとわかった ら、私はチャンネルを変えないとい けない。ずっと昔は皆がそうしてい ましたが、本が良ければ読む、害を 与えるなら、捨てるのです」。本を 選ぶとは、友達を選ぶとき、またど んな映画や芝居を見に行くかを決め るときのように、キリスト信者に

とって責任を伴う自由な行為であり、道徳的な善悪に関わる行為である。

無知や軽薄さによって悪い本を読む 危険をさけるために、一つの助言は 沢山読むのがよいということだ。異 なる著者、多様な内容の本を。こう してオープンなメンタリティを育 て、根拠のない偏見を打ち破り閉鎖 的な小グループから抜けだし、魅力 的な仕方で信仰を生き伝える準備が できる。同時に、自らの形成に対す る責任を感じれば、質の高い本を読 もうとするだろう。つまり、人間的 にも超自然的にも成長する助けとな る本を選ぶのである。この点に関し ての賢い助言を一つ。「偉大な本は 寛大な王のようである。あたかも自 分と同列の人であるかのように読者 に接する。二流の作家は、自分の低 い身分を隠すために読者に対し尊大 な態度を取る | (ゴメス・ダビ ラ)。

よく本を読む人の助言は、読書の計 画を立てるために、また様々な著者 を知り、どの点に足らないところが あるかを理解するために、とてもあ りがたい。好意的な論評のおかげで 今まで知らなかった良い作品を発見 したり、文化的、知的、霊的な展望 を広げたりすることも珍しくない。 あるいは憎しみや対立を助長した り、宗教を攻撃したりする有害な読 書で時間を無駄にすることから私た ちを守ってくれる。また、読む側の 知識が不十分なために害を受ける読 書もある。大人にとっては問題なく ても子どもにとっては堅くて食べら れないパンもある。自分の限界を認 める知性の謙遜を持つのが良い。こ れは偽善ではなく、分別である。他 人の助けを得るなら、私たちの知的 好奇心を導く他の読書方法を見付け ることができる。より考えられた読 書によって鍛錬された後で、その必 要がある場合、以前なら害を受けた だろう本を読んでみることができる

ようになるだろう。要するに、各自 が読書によって作っていく文化がイ エス・キリストの教えを体現し、自 分の生活経験と合致するよう努める ことである。害のある本を読む人だ けでなく、少ししか読まない人も、 異なる仕方であるが、誤りに対して 抵抗力を持たない。

助言することと助言を受けること

た短い紹介の方が、長く詳細な書評より実用的であることがよくある。 このような試みに協力してくれる人 が多ければ多いほど、書物の紹介は より客観的で的を射たものになるだ ろう。

雑誌や新聞などの書評欄も役立つことがある。評者が信頼できるかどうかを知るのは、その職業上の評判、どんな文化的、教義的教育を受けたか、または意見を述べ方を見ることではい。読書の選択をするとき大いになるのは、このような様々な意見を参考にすることである。

ともかく、読書において助言を求め、受けた助言を参考にすることは必要ではあるが、几帳面すぎる考え、あるいは表面的な考えを避けるのも大切である。ある本についての具体的な評価は、読書の方向性を示し危険を避けるということ以上のこ

とではなく、これらの評価のあるも のが時間とともに変化したとして も、あるいはある人に対しては不都 合はなくても、別の人にはそうであ るとしても、何の不思議もない。本 の評価はあくまでもよりよい読書を するための案内である。同時に、霊 的指導において読書の助言を仰ぐこ とを否定するものでもない。他方、 文化的な作品の道徳的評価に注意す るべきであると強調することが、本 質的なことから目をそらさせるよう なことになってはならない。つま り、読書の重要性、各自の可能性に 応じて、できるだけ沢山読むことの 重要性である。

「霊を消してはなりません。預言を 侮らないようにしなさい。しかし、 そのすべてをよく吟味しなさい。そ のうえで道理にかなったことを大切 に保ち、悪いことならどんなことで あっても、それに近づいてはなりま せん」(『テサロニケ前』 5 章 19~22)。開かれた考えをもつこと や広い展望を持つこと、それらが真 実なものになるのは、真理と美を探 し求め見いだすことに情熱を感じる ときである。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/dokusho-2/ (2025/12/10)